Japanese association of educational psychology

発　達　7-2

たくましい社会性に関する縦断的研究（２）

○山岸　明子・二宮　克美・首藤　敏元
（順天堂医療短大）　（愛知学院大学教養部）　（埼玉大学教育学部）

目　的

前研究（1994,1995）で「たくましい社会性」として設定した変数の得点が小５から中１でどう変るか（変らないか）を、縦断的データに基づいて検討する。調和（他者との関係を築くことと直接関連する変数）については（１）で報告したので、ここではそれ以外の変数ー独自性（個としての自分の実現）、社会的行動傾性、学校生活意識ーをとりあげ、２時点間の相関及び学年（2時点）×性の２元配置の分散分析によって、各変数の発達的変化を検討する。

方　法

〈質問項目〉　独自性ー①自立感、②効力感、社会的行動傾性ー③協調志向（対人的葛藤を協調的に解決しようとする傾向）、④交渉による解決（交渉によって社会的問題解決を解決しようとする傾向）、⑤民主的価値意識（民主的な行動ー異質な意見や人に対する寛容さ）、学校生活意識ー学校環境への適応として⑥孤独感、⑦学校への好意度、⑧学校適応、学校環境の認知として⑨協同的環境の認知、⑩主体的環境の認知を表す質問項目、各3～10項目に関する5件法の質問紙調査。

〈被調査者〉〈調査時期〉研究(1)と同じ。

結果と考察

２時点間の相関係数は、独自性が一番高く、学校環境への適応が.3台、社会的行動傾性は.3から.2台と下がり、学校環境の認知（特に主体的環境）が最も低かった。自立感や効力感は、調和の変数である共感性や向社会的コンピテンスと同様に安定性が比較的高く、孤独感や学校適応などがそれに続き、ある場面での判断（③④⑤）は安定性が更に下がることが示された。学校環境の認知に関しては、小５→中１で属する学校やクラスが変るが、それがどう変るかはグループによって異なるため、相関係数が低くなったと考えられる。

分散分析では、時期の効果が５変数で見られた。効力感と交渉による解決は中１で下がっているが、これは小５ー中２のデータ（1995）と同じ傾向であり、年齢と共に下がることが縦断的データによってより確かに示された。一方小５ー中１で孤独感が下がり、学校への好意度、主体的環境の認知があがるという結果は、小５ー中２のデータと異なっていた。これはコホートの差なのか、それとも中１から中２にかけて否定的方向に変るのか検討が必要だろう。性差に関しては、小５ー中２のデータとほぼ同じ結果だった。

表１　たくましい社会性の各変数の２時点間の相関係数及び２時点の平均値と分散分析の結果

	相関係数			男子		女子		縦断データ		横断データ	
	男子	女子	全体	中１	小５	中１	小５	中1-小5	男-女	中2-小5	男-女
自立感	.396***	.485***	.438***	15.57	15.74	16.05	16.07			>*	
効力感	.621***	.512***	.582***	19.82	21.32	18.30	19.48	<***	>***	<***	>***
協調志向	.230***	.220**	.285***	8.08	8.54	9.57	9.40		<***	<***	<***
交渉による解決	.336***	.307***	.322***	4.21	4.27	4.18	4.28	<*		<***	
民主的価値	.178*	.383***	.270***	17.41	17.48	18.01	17.83				<*
孤独感	.391***	.322***	.364***	13.01	13.58	12.52	13.33	<**		>*	
学校への好意度	.361***	.393***	.379***	24.11	23.86	25.24	24.33	>*	<*	<***	
学校適応	.398***	.346***	.374***	42.09	42.11	43.29	42.48				
協同的環境の認知	.335***	.204**	.271***	17.91	18.15	18.03	18.10			<***	
主体的環境の認知	.215**	-.087	.073	18.70	17.48	18.97	18.29	>***	<*		<*

NII-Electronic Library Service